

湖南省長沙簡牘博物館訪問記

谷中 信一

9月11日（木）午前、われわれ一行（曹峰・名和敏光・小寺敦・谷中信一）は宋少華氏が館長を勤める簡牘博物館を訪問した。今回の調査団の公式訪問としては最後の訪問先である。

多忙の中を出迎えてくれたのは宋館長であった。彼は、われわれを大きな作業台が置かれている部屋に案内し、移転前の住所を塗り込んだ古い名刺を差し出しながら、まず自分は館長職にあることを好まぬ、研究に専念している方がよいとして、館長職を持する予定であることを開口一番告げると、次いで今回の訪問の目的が何であるかを単刀直入に尋ねてこられた。

そこでわれわれも簡単な自己紹介のあと、直ちに本題に入った。以下はその摘記である。

☆簡牘博物館について…

「現在、3名の研究生と5名の館員で簡牘類の整理を行っている。主には、三国呉簡を扱っている。」

☆出土竹簡類の保存処理について…

「現在は、出土した竹簡を、洗い出し（清洗）を行い、これを乾燥させて保管するという行程を進めている。」

「その処理工程は、まず数ヶ月をかけて薬水（アルコールと蒸留水の混合液）に漬けたり出したりする。それから強制乾燥させる。自然乾燥は、1年を要する作業となるので採用していない。」

「処理方法にはいくつかの方法がある。上海博物館のやり方は真空方法。その他湖北省博物館・荊州博物館のやり方、北京のやり方。みなそれぞれ特色ある方法を用いている。」

「当博物館は、湖北省博と協力しながら作業を進めている。」

「具体的な処理方法については、それぞれ非公開で、脱水方法や薬水の成分などは秘密である。また、日本の木簡などの処理方法とも異なっている。」

「かつては、アルコールに五香胶（これが何であるかについては聞き逃した。）の混合液を用いていたが、現在は用いていない。」

☆今後の考古発掘と、新出土資料発見の見込みについて…

「現在、学術的な考古発掘作業はすべて“受動発掘”である。大きな土木工事が行われるときに付随して行われる。一方、盗掘はすべて“能動発掘”である。こちらはいつでもどこでも発掘の意志さえあれば直ちに着手することができるので効率がよい。」

「長沙市内の建設ラッシュは一段落したので、今後は地下15メートル以上掘り下げる建設現場はなくなることから、平和堂の地下駐車場建設工事に伴って発見された相馬楼呉簡のような発見は望み薄である。」

「従って今後は“受動発掘”によるよりも“能動発掘”による新発見の可能性の方がはるかに高い。このため、盗掘によって発見された竹簡類は、今後もブラックマーケットを通じて流出していくだろう。」

「盗掘竹簡の流通につれて、偽物も増加するだろう。既に現在、骨董市場にはこの両方が流通しており、真贋の判別が相当困難になりつつある。」

「最近では上海博物館が香港の骨董店から盗掘竹簡を買い入れたことで知られているが、あそこも一度にすべてを購入したわけではなく、4回に分けて順次購入していった。」

（本館訪問に先立つ上海博物館訪問の際、これまで聞いたこともないような文献（楚文字で書かれた辞書で『字析』と名付けられている）を持っていることを知らされたのであったが、これも当初の買い付けの中にはなく、その後に買い付けた盗掘竹簡の中に含まれていたのであろうと思われる。）

「木牘の材料として、長江以南では、竹の他には杉が用いられる。北方は楊が用いられる。」等々。

この後、いよいよ 2004 年に発掘されたいわゆる「相馬楼漢簡」（漢武帝時）を実見の機会を得た。難なく文字が読み取れる程に見事な保存処理がなされている。

以上で館長との面会を終え、引き続いて二人の館員の案内で館内を見学する。新築されたばかりの本館は、立派な構えと明るい展示室を持ち、快適に見学ができるように作られており、その工夫されたレイアウトはわれわれを全く飽きさせることがない。加えて相馬楼呉簡などをはじめとして実物を惜しげもなく大量展示するなど地の利を十分に生かした展示は、簡牘に関する情報をほぼ網羅的に提供している。この他、相馬楼呉簡の発掘現場を再現した原寸大の模型を展示したり、竹簡の制作過程を人形を用いて展示したり、いわゆる西域など遠隔地で発掘された木牘類についてはレプリカを陳列したりして、博物館の名にふさわしく視覚から多くのことを学ぶことができるようになっており、大いに啓発的であった。